モリヌークス問題

——バークリとコンディヤック——

栗田充治

一、モリヌークス問題のはらむ諸問題

モリヌークス問題とは、開眼手術を受けた先天盲や早期失明盲の人が、手術後見えるようになったときに、ただ見るだけで、眼の前に置かれた事物、例えば球と立方体、を識別できるか、という問題である。ウィリアム・モリヌークスがはじめてロックに提起し、ロックがそれに応えて『人間知性論』第二版（一六九四）にモリヌークスの手紙（一六九二年か九三年の三月二日付）の一節を引用して彼の否定の答を支持したことから、「モリヌークス問題」として有名になり、十八世紀の西欧哲学文献に好んで取り上げられた問題である。[1] モリヌークスは妻の失明という事情から盲人の問題に関心を寄せていたそうだが、[2] パークは、モリヌークス問題を提起した数年前の手紙があって、それはロックが紹介したものにない問題を含んでいることを指摘している。[3] その手紙、すなわちアムステルダムのウェズバージ商会気付で「哲学的知性論の著者」[4] 宛に送られた一六八八年七月七日付のモリヌークスの手紙にはモリヌークス問題が次のように提起してあった。

生まれつきの盲人の手にほとんど同じ大きさの球と立方体があずけられ、「球」や「立方体」と呼ばれるのはそれぞれどちらか、よく話して教え、その結果、彼はふれることによって容易に両者を区別できるようになった。そこで球と立方体を彼から取り上げテーブルの上に置く。彼の視力が回復されたと想定しよう。はたして彼は、見るだけで、それらにふれる以前に、どちらが球でどちらが立方体だかわかるだろうか？　あるいは、はたして彼は、見るだけで、手をのばす以前に、それらを手をのばして取れないかどうかわかるだろうか？――たとえそれらが彼から二十フィートか、あるいは千フィートも離されていたとしても。[5]

モリヌークス問題の「初版」には第二の問いとして、距離の知覚の問題が提起されていたのである。この「初版」についてはモリヌークスもロックもその後なんの言及もしていない。しかしモリヌークスの方は『新屈折光学』（一六九二）の中でも距離の視知覚の問題を論じているので、[6] どうやら第二の問いを無視した責任はロックの方にあるようである。[7] だが、距離の視知覚の問題こそバークリが『視覚新論』（一七〇九）でまっさきに取り上げる問題である。

ところで、モリヌークス自身の答えは、「触覚をかくかくに感発するものは視覚をかくかくに感発しなければならないという経験」を開眼盲人がまだ獲得していないから、というものであった。[8] ロックはこの答え方を支持した。しかし、ロックはそのとき、当時プリーストリらが指摘したように、モリヌークスの問題設定にひとつの新たな条件を付け加えていた。それは、「一見したところでは」at first sight という条件である。デーヴィスは、「開眼盲人が動いたり歩き回っていろいろな角度から対象を見るということをしないで」という意味にこの条件を解釈しているが、[9] 必ずしもそう考えなくてもよい。むしろ、「じっと注意深く見つづけるということをしないで」と解釈してもよかろう。というのは、ロックは、「空間（延長）、形、静止、運動」の観念は触覚によっても視覚によっても獲得されうる観念

である、と考えているからである。[10] そうすると、球は丸い形に見え、立方体は角張った形に見えるはずだから、開眼盲人に多少の想像力と推理力があれば、彼は球と円、立方体と多角形、というそれぞれの間により親密な関係を認め、ある程度の自信をもって丸く見える方を「球」と呼び、角張って見える方を「立方体」と呼ぶことだろう。では、「一見したところでは」という段階を過ぎて開眼盲人がじっくり観察を行えば、彼はただ見るだけで、ふれる以前に、球と立方体を識別できるはずではないか。ロックはなぜ否定の答を支持したのか。彼の哲学の前提になにか誤りがひそんでいるのではないか。こうした疑問はバークリやコンディヤックが執着した疑問である。

このように、モリヌークス問題には、我々の認識をめぐるいくつかの問題が構造的に連関しながら含まれている。そのことを明確に指摘したのはコンディヤックやディドロであった。たとえばディドロはモリヌークス問題のはらむ諸問題を次のようにまとめている。

先天盲人の問題は、モリヌークス氏が提出したのよりもう少し一般的に取り上げると、二つの別個の問題を含んでおり、我々はそれらを別々に考察していきましょう。我々は次のように問うことができます。(一)先天盲人は白内障の手術後すぐに見えるようになるのか？ (二)見える場合、形を識別できるほど十分に見えるのか？ さわっているときにつけていたのと同じ名前を眼に見えるその形にまちがいなく適用できるのか？ その名前がその形にふさわしいことを論証できるのか？[11]

したがってディドロは厳密に言うと四つの問題をモリヌークス問題のうちに見出していることになる。第一は視覚器官の機能の回復の問題であり、これをはじめて指摘したのはコンディヤックである。第二は視覚の本来の対象はなにかという問題である。前述のように、ロックは形なども視覚の対象として考えたが、バークリはそれを否定し、視

覚の直接の対象は「明るさと色調のバラエティ」だと主張した。第三は視覚を通じてもたらされた観念に名前を適用する問題である。モリヌークスは「識別する」distinguish と「名前を言う」tell をほぼ同一視しており、ロックも大体そうだが、しかしモリヌークス問題への言及の中でのロックの言い方は、開眼盲人は「どちらが球でどちらが立方体だと確信をもって言う say ことはできないだろう」というもので、ロックの関心はやはり「名前を呼べるか」という問題に向けられていたと考えてよかろう。[12] 第四は、名前の適用を論理的に正当化する問題である。丸く見える方を「球」と呼び、角張って見える方を「立方体」と呼ぶのがなぜ正しいのかを論証する問題である。これは言い換えれば、感覚的情報をもとにした推論の正当化の問題である。ディドロは被験者の知性に四種類――無学者、教養人、形而上学者、幾何学者――の場合を設定してそれぞれの場合の答え方を予想しており興味深い。[13]

二、バークリ

バークリは距離の視知覚の問題に執着する。というのは距離（奥行・遠近）は本来は見えないはずだから。網膜像の発見は眼を一種のカメラとして考えることを可能にしたが、そのことは、メッツガーが定式化しているように、「網膜像に見出されないものは視覚にも現われない」という根本命題を視覚論の基礎に暗黙のうちに据えることになった。[14] そうすると、眼から対象までの距離は、網膜上には常にひとつの点としてしか投影されないので、網膜像そのものには距離に関する直接情報はなにもないことになる。ただ、網膜像及びそれに対応する視像には、画像の鮮明度や対象の大小、眼と対象の間に介在する景色などの、距離に関する情報として晴眼者には馴染み深いものがあるが、しかし

これらの情報は本来は距離とはなんの関係もないものであるので、[15] 逆に我々は絵に欺かれて二次元の空間のうちに三次元の空間を見てしまうのである。そこでデカルトは眼としての精神を遠距離を測ることが苦手な測量技師だと考えようとした。[16] しかし、我々の眼は角度や光線を見るわけではない、と指摘するバークリは、むしろ見るという活動に伴ってもたらされる三種の情報を距離の知覚にとってより原理的な重要さをもつものとして考察する。[17] それは、(A)ひとみの配置と向きの変化の知覚、(B)視像の混乱度の知覚、(C)眼筋の緊張度の知覚の三つである。これらの情報はいずれも手が届く程度の近距離に関するものだが、(A)と(C)は、視覚情報というよりはむしろ、今日の感覚の分類によれば「体性感覚」と呼ぶべき、広義の触覚に属する情報であり、バークリものちの『視覚論弁明』(一七三三)ではそう明言している。[18] それにまた、(B)の情報も対象が眼のごく近くへ持ってこられる場合にもたらされる情報である。すると、距離に関する重要な情報は、ただ見るだけの受動的な知覚者ではなく、手の届く対象を近寄せたり遠ざけたりしながら注視する能動的な知覚者にもたらされるものであり、もし彼が移動するならば、距離に関する情報はさらに広範囲に提供されることになるだろう。だからバークリは、距離の観念は本来は広義の触覚によって直接に知覚されるものであるが、それとならんで同時に視覚情報も獲得されるので、しだいに触覚の観念と視覚の観念の間に偶然的だが繰り返されることによってきわめて強い結合力が生じ、こんどは視覚情報だけで、距離を告げる触覚情報が我々の心に「暗示」suggest されるようになるのだ、と考えるのである。ある知覚が他の感覚を暗示するということをバークリは、ある観念が他の観念の符号になることだと説明した。[19]

視覚の観念と触覚の観念の習慣的結合にもとづいて本来の視知覚が変容することを、ロックは「気づかれることのない素早い判断」による感覚の修正だと説明した。バークリは用心深く「判断」ということばを避け、視知覚の変容

を知覚の暗示作用の結果として説明しようとする。しかしバークリにとっては、感覚の直接の対象がすでに観念にほかならず、観念は他の観念の符号となりうるものであり、符号としての観念は人間の場合記号としての言語を予想し、言語と結びつけられることによってはじめて豊かな観念世界が構築されうる。したがって、バークリは知覚と判断を区別し（T.V.V. § 42）、視知覚の変容を知覚のレベルにおけるプロセスとして考えようとしているが、それと同時に、名前を適用できるかというモリヌークス問題にひきずられてか、それを一種の推論としても考えようとしており、なおあいまいさが残らざるをえない[20]（T.V.V. §§ 27, 28, 53, 54）。

視覚の観念は触覚の観念の符号である。同様にことばは事物の符号である（N.T.V. § 140）。我々は対象を知覚する場合、その知覚を自覚するためには、触覚の観念への暗示を媒介としてとらえ直された視覚の観念を、事物の符号としてのことばによってつなぎとめながら、対象の知覚を事物の知覚として自覚するのである。ある視覚情報にある触覚情報が対応することは偶然のことであるが、しかしたとえば、可触的方形を表示する最も適切な可視的形態が四辺と四つの等角をもったものであるということは必然的である、とバークリは言う（N.T.V. § 142）。視覚の観念と触覚の観念はおよそ異質なもので、その間に相似の関係などはありえないが、両者は符号として最も適切な対応関係をもたざるをえず、またもつからこそ「方形」という同一の名前が両者に適用される。だが、すでに「方形」という名前を適用された視覚の観念は、もうその段階では視覚＝触覚結合のもとに知覚された事物にほかならない。視覚の観念から触覚の観念への推移が暗示というプロセスを通じて知覚のレベルで進むとすれば、たしかにその推移は「知覚できない」（N.T.V. § 145）ものだろう。だが、この推移は、視覚の観念に同じ名前を適用できることを確認することによって、結果として追認されるのである。この確認と追認の作業はもはや知覚の問題ではなく、名称付与や推論の正

当化の問題に連なるものだろう。

同様のあいまいさは網膜像の取扱い方にも見受けられる。距離は網膜上にはひとつの点としてしか現われないから距離は直接には眼で見られないという地点から出発したのであれば、そしてそれでもやはり我々の眼としての精神は事実として奥行や遠近を見てとるのであれば、バークリの視覚の哲学は網膜像の呪縛から自由にならねばならなかったはずである。しかし、デカルトが我々の精神は、網膜像や皮質像を脳の中で見つめるもうひとつの眼などと考えられてはならない、と正しく指摘しながら、なお「生得的幾何学」を想定してしまったように、バークリも、網膜像は本来は広義の触覚に属する現象だと正しく指摘しながら、なお、眼に見える「絵」と網膜像との間のある比例関係へと議論をむしかえしてしまう（T.V.V. §§ 50〜57）。バークリが視覚の哲学をある意味ではふたたび網膜像と視覚的絵との間の静的な対応関係へと閉じ込めてしまったのはなぜか。恐らくそこには彼の非物質論的構想がひかえており、それが知覚者の触覚に依拠した活動的な知覚探索という場面を早々とカットしてしまうことになったのだろう。その興味深い場面の続きを楽しむためには我々はバークリを離れてコンディヤックへと向かわなければならない。

三、コンディヤック

モリヌークス問題についてのロックとバークリの見解はヴォルテールによってフランスの思想界に伝えられた。

私がかなり遠くにある家の屋根の上に立っている人を小さな穴を通して眺めるとしよう。対象の遠さとそれから眼に届く光線の少なさのゆえに、それが人間かどうか私にはよくわからないし、それはとても小さく見えるので、

私にはせいぜい二フィート程度の立像のように見える。ところがそれが動いたので私はそれを人間だと判断する。するとその瞬間に、それは並の体格をした人間として私には見えるようになる。いったいこれら二つの判断のくいちがいはどこからくるのだろう。それを立像だと思っていたときには、対象を見る視角にもとづいてそれを二フィートの大きさだと想像した。網膜上に投影される像を魂に否定させるように仕向けるものは経験しかない。それで、私がそれを人間だと判断するやいなや、経験を通じて脳神経内に形成された、人間の観念と五、六フィートの背丈の観念との結びつき（リエゾン）が、無意識のうちに突然の判断を通じて、私に、私はいま五、六フィートの背丈の人間を見ているのだと想像させ、そして実際にもそのように見させることになる。[21]

したがって、「我々はちょうどことばを話したり読んだりすることを学ぶのと同じように、見ること voir を学ぶのだ」とヴォルテールはバークリの視覚論を要約してみせた。しかしヴォルテールのこの紹介の仕方でも、依然として知覚と判断の区別はあいまいなままである。コンディヤックは『人知起源論』（一七四六）でそこを突く。「意識されない突然の判断」とはいったいなにか。見ることと判断することは全然別の事柄ではないのか。「我々がそこにすべての注意を集中しているとき、最初の知覚がかくも素早く姿を消し、ある判断が、我々がその移行に気づくことができないほど突然に、それを別の知覚に取替えるなどということがありうるだろうか」とコンディヤックは反論する。[22]

開眼盲人が眼を開けた最初のときに、ただぼんやり見ているだけだとしたら、たしかに彼の眼には明るさと色調の混乱しか見えない。しかし彼が吟味しながらじっくりと注意深く観察していけば、彼は見るだけで対象の空間的性質に関するなにがしかの情報を獲得できるようになるだろう、とコンディヤックは予想した。この予想は、先に見たとおり、ロックやバークリとそれほどかけはなれたものではない。ロックもバークリも、開眼盲人の眼がなにかを見る

ことができるということを当然のこととし、ただ、触覚の観念へ適用することを学んだ名前を、視覚を通してもたらされるまるっきり新しい観念に適用できることを彼が経験によって知るに至っていないので、二人はモリヌークス問題に否定の答を予想したのである――ロックの場合はもう少しあいまいだが。二人とも、最初の全く受動的な視覚状況を除いて、その後の能動的な探査視覚の場合には眼は何ものかを識別するだろうことを疑ってはいない。ただバークリは、視覚の観念と触覚の観念の異質性にこだわった。見ることvoirを学んだ眼は形や奥行などを識別するが、それでも可視的形態と可触的形態とは全く異質な観念でありつづける。両者を緊密に結びつける原理はあくまで知覚の暗示作用であり観念の符号化である。しかし、無数の多様な観念の大海の中にかなり一様な符号関係というひとつの秩序が出現するのはなぜなのか。バークリはそこで人間にとって偶然的な観念間の対応関係の究極的な原因を、自然の創作者たる神（無限精神）にさかのぼらせるのである。観念間の習慣的な結合は、それ自身の形成過程については括弧に入れられたまま、視覚の観念を神の普遍的言語として読みとる聖地として位置づけられる。ところがコンディヤックにとっては、バークリの閉じた括弧の中にこそ問題の鍵がひそんでいると思われたのである。

開眼盲人は注意して見つづければ対象の空間的性質を識別できるはずである。しかし、チゼルデンの実験（一七二九）は反対の事実を明らかにした。チゼルデンの盲人は開眼後二ヵ月も対象の空間的性質を正しく見てとることができなかった。この事実をどう考えるべきか。ここからコンディヤックの方法の真価が発揮されていく。彼の方法とは発生的方法である。

観念の源泉として感覚と内省という二つを考えたロックにならいながらも、彼はこの二つをいずれも魂の変様だと理解し、感官を機会因として触発された魂の変様が「第一の思考」としての感覚であり、次いでそうした自らの変様

について注意を向けていく魂のあり方が「第二の思考」としての内省であると位置づける。[23] こうして我々のすべての精神的機能を唯一の源泉である感覚にさかのぼってそこからの生成発展として理解しようとする立場がコンディヤックの感覚主義にほかならない。ディドロは「明白な知覚から明白な知覚へとたどること」がコンディヤックの哲学のすぐれた方法だと指摘しているが、[24] 魂が最初は受動的におこされる自分自身の変様に注意し、記憶し、比較していくプロセスを一歩一歩たどることによって、それらに対応する観念に一義的なことばをあてはめていけば、哲学から不明瞭で混乱のもととなる用語を追放でき、それによって哲学をニュートンの自然学のように確実な学に立て直すことができる、というのがコンディヤックの基本的な構想であった。

こうした発生的見地から、チゼルデンの盲人が要した二ヵ月という時間の理由は、長い間使われることのなかった眼のメカニズムがうまく調和して働くようになるためにはある程度の練習の時間が必要だということだ、とコンディヤックは説明する。[25] 感覚器官の成熟と学習という新しい視点を提供したのはコンディヤックの功績のひとつであろう。

ひとつの真理の発見はときとして他の真理をくもらせることがある。視覚器官の成熟と学習の必要という説明は、眼も見ることvoirを学ぶ必要があるということを強調するあまり、じつは眼が見るのではなく眼という感官をもった魂が見るのだから、その説明だけでは答にならないということを忘れさせてしまう。この点が、恐らくディドロの批判ということともあいまって、八年後にコンディヤックに『感覚論』(一七五四)を書かせたのだろう。

『感覚論』は、『人知起源論』では感覚の印象がえられればすぐにその感覚の含みうる観念すべてを獲得できると考えていた点で誤っていた、と自己批判している。[26] この誤りがモリヌークス問題への肯定的答を強調させたのである。

『感覚論』でのコンディヤックは、眼を開ければなんらかの視覚の印象が与えられる次元の「見ること」voir と、その視覚印象を分析しその結果を視覚の対象として把握する次元の「見つめること」regarder とを区別し、モリヌークス問題の鍵は視覚におけるこれら二つの次元を区別することにあるとまで言うのである。[27] 魂の受動的な変様が voir としての視覚であり、眼は voir を学ぶ必要があるが、魂は voir を学ぶ必要はなく、魂が学ばねばならないのは regarder なのであり、注意によって能動的に導かれる探査視覚のあり方が regarder なのである。

注意とは快苦の原理によってひとつに固定された感覚ないし他よりも活発な感覚であり、それによってかつてつくられた感覚印象を再現することが記憶である。そこに比較が可能となり、その結果諸々の感覚印象の相違や相似の関係を知覚することが判断にほかならない。比較や判断の作用は注意そのものであり、多くの判断を経て形成されるものが観念であり、こうした多くの判断の系列を進む注意が内省である。

したがって、「すべての感覚に判断が混じる」とコンディヤックが言う場合、それは、ロックの場合のように、感覚とは別の源泉としての内省によって成り立つ判断が感覚を有無を言わさず突然に変更するということではなく、あくまで知覚のレベルでの魂の変様のプロセスの一環として理解されなければならないだろう。こうしてコンディヤックの議論は、モリヌークス問題を、一応、名称付与やその論証の問題から自由なところで検討することに成功するのである。

四、結　語

網膜像や皮質像にこだわれば距離を直接には見られないことになる。距離とは、知覚者から対象が離れていることであり、対象が知覚者の精神の外に存在することである。対象を知覚者の精神の外にあるものとして知覚させるものは、視覚論のバークリにとっても、感覚論のコンディヤックにとっても、広義の触覚だけであった。触覚は、それを感じる魂の変様としてだけではなく、同時に感官の変様としても知覚される。[28] 私が自分の手で自分の胸をさわる。皮膚の固さが手と胸を相互に押し合う。手と胸の両方に「私」を見出す魂はやがて自分の所有する身体を自分の外に発見する。次に手が本をさわる。魂は手を押し返す本の固さのうちに「私」を見せない。そこで本は、私の身体でもない「他者」として、私の身体の外に発見される。[29]

コンディヤックはかくして独我論の蟻地獄から身軽に脱出してみせる。ところが『人知原理論』(一七一〇)のバークリは、論理的に首尾一貫した形で、触覚も感覚のひとつである以上可触的対象は知覚者の精神の内にしか存在しない、と主張する。それを原因としての物質的世界に帰するのは知覚ではなく推論にほかならない。だが、知覚の暗示作用ないし観念の符号化という結果から、我々の視覚へ有意味なメッセージを送りつける神という究極の原因へとさかのぼらせるものもやはり推論であり、バークリがこの種の推論を神の存在の単純明快な論証だと考えているとしたら、それは同時に、感覚印象をもたらす物質的世界が我々の精神の外に存在することも、少なくとも神の存在と同程度には確証することになるだろう。バークリはこのことを承知していたはずである。知覚＝暗示の次元と判断＝推論

の次元はたしかに区別されるべきであるが、しかしそこにはやはりある種の対応関係が想定されざるをえない。知覚が他の感覚を暗示し、それゆえ自己を超えた意味を開示するものであるためには、意味を産み出し、意味に反応し、意味を汲み取る能動的な精神が前提とされている。そして有限な精神は、それらの意味の究極の発生源としての無限精神へと向かわざるをえないだろう、というのがバークリの根本的な発想であると思う。

見方を変えるとまた次のようにも言えるだろう。コンディヤックはすべてのプロセスを透明化しようとした。意識されない知覚はありえないという確信をもって彼は習慣形成のプロセスを流麗に余すところなく描き出してくれた。だが、こう問うこともできる。その結果なにが残ったか、と。彼の感覚論は、人間というものが結局は自分自身で人間になりゆくものでしかないことを、強く印象づけてくれた。[30] しかしそこで我々の前に描き出される人間は、快苦という第一原理の枠内で動き回る自然児でしかないではないか。他方バークリは、視覚と触覚の観念の異質性という単純な事実から出発したが、習慣形成のプロセスについては、知覚の暗示、観念の符号化という色彩をほどこしただけで、不透明なままに残した。しかしその不透明さの彼方に彼は神のまなざしを感じとった。見るというなにげないふるまいの中に満ちている神のメッセージ――そのやさしさ、その苦悩を謙虚に見守るように。この対比はあるいは誇張かもしれない。だが、すべてを透明化し合理的に説明してしまえばそれでよいと言い切ることはできないだろう。肝心なことは、その知見がどれだけ我々の見るというふるまいを豊かにしてくれるか、ということだろうから。

註

(1) モリヌークス問題の思想史的背景と十八世紀西欧哲学における反応については、M. J. Morgan, Molyneux's Question, Cambridge U. P. 1977 が詳しい。概略については J. W. Davis, The Molyneux Problem, in Journal of The History of

Ideas, Vol. 21, 1960 が手頃である。邦語文献では、カッシーラー『啓蒙主義の哲学』中野好之訳、第三章、紀伊国屋書店、一九六二があり、また心理学サイドの文献だが、鳥居修晃編『現代基礎心理学』第三巻「知覚Ⅱ」、第二章、東京大学出版会、一九八二が有益である。

(2) J. W. Davis, op. cit. p. 393

(3) Désirée Park, Locke and Berkeley on the Molyneux Problem, in Journal of The History of Ideas, Vol. 30, 1969

(4) ロックは『人間知性論』の梗概を仏訳してもらって『ビブリオテク・ユニヴェルセル』第八号（一六八八年一月）に掲載したが、そこでは、この梗概はロック氏によって「伝えられた」とだけ紹介してあった。

(5) Désirée Park, op. cit. p. 254

(6) バークリは『視覚新論』第四十節でモリヌークスの距離視知覚論を批判している。

(7) Désirée Park, op. cit. pp. 259～260

(8) Locke, An Essay concerning Human Understanding, 1694², Oxford, 1975, Book II Chap. 9 § 8 p. 146 大槻春彦訳『人間知性論』㈠、岩波書店、一九七二、二〇五頁

(9) J. W. Davis, op. cit. p. 304

(10) Locke, op. cit. Book II Chap. 5, Chap. 9 § 9

(11) Diderot, Lettre sur les Aveugles, 1749, in Œuvres philosophiques, Garnier, 1964, p. 132 平岡昇訳『盲人に関する手紙』、『著作集』第一巻所収、法政大学出版、一九七六、八五頁。なお訳文は適宜改めてある。

(12) モルガンはモリヌークス問題のうちに知覚そのものの問題と名称付与（ネイミング）の問題の二つを区別し、後者の展開をロック＝バークリの系列に、前者の展開をコンディヤック＝ディドロの系列に、それぞれ読みとろうとしているが、やや図式的にすぎるし、ロック解釈にも問題が残る。M. J. Morgan, op. cit. pp. 100～105

(13) Diderot, op. cit. pp. 141～143 邦訳九三～九四頁

(14) メッツガー『視覚の法則』盛永四郎訳、岩波書店、一九六八、四頁。なおこの命題は、「まず感覚のうちに存しなかったものは悟性のうちにも存しない」というスコラ的表現をとった経験論の根本命題に結びついている。

(15) Berkeley, An Essay towards a New Theory of Vision, 1709, in The Works of George Berkeley, Vol. I ed. by A. A.

Luce, Nelson, 1967, §§ 3, 28, 36（以下 N.T.V. § 3 などと略記）

(16) デカルトの距離の視知覚論については、拙論「バークリの視覚の哲学」（本紀要第二七号所収）七九～八〇頁を参照のこと。

(17) Berkeley, N.T.V. §§ 16, 21, 27, 34, 35, 36

(18) Berkeley, The Theory of Vision Vindicated and Explained, 1733, in The Works, Vol. I, § 66（以下 T.V.V. § 66 と略記）

(19) バークリの観念の符号理論については、前掲拙論、八一～八二頁を参照のこと。

(20) また、たとえば知覚は我々の心に他の感覚を暗示するという場合、N.T.V. では心は悟性 understanding として考えられているが、T.V.V. では想像力 imagination として考えられている。N.T.V. § 45, T.V.V. § 10 を見よ。

(21) Voltaire, Éléments de Philosophie de Newton, 1741, Seconde Partie, Chap. VII, in Œuvres de Voltaire, Tome 43, Paris, 1839, p. 180

(22) Condillac, Essai sur L'origine des Connaissances Humaines, 1746, Premiere Partie, Section VI, § 8, Galilée, 1973, p. 185

(23) ibid, Section I, Chap. 1, §§ 3, 4, pp. 107～108

(24) Diderot, op. cit. p. 140. 邦訳九一～九二頁

(25) Condillac, op. cit, Section VI, 16, pp. 188～190

(26) Condillac, Traité des Sensations, 1754, Troisiéme Partie, Chap. 3, § 6, in Œuvres philosophique de Condillac, Tome I, Paris, 1947, pp. 280～281 加藤周一・三宅徳嘉訳『感覚論』創元社、一九四八、下巻三〇～三三頁

(27) ibid.

(28) ibid. Seconde Partie, Chap. 4, §3, p. 254 邦訳上巻一六八頁

(29) ibid. Chap. 5, §§3～5, pp. 256～257 邦訳上巻一七二～一七五頁

(30) ibid. Quatrieme Partie, Chap. 9, §3, p. 314 邦訳下巻一三九頁